

## 月に行ったクロウサギ

奄美市立屋仁小学校 五年 諏訪 朱音

「ええっ、奄美で金かん日食が見られるの。」

アマミノクロウサギのクロは、月や星が大好き。世界中を飛び回って見に行くほどだ。クロはニユースで金かん日食が五月二十一日にあると知り、月まで手が届いてしまうくらい、高く高くとびはねた。やった。ついに、あの金かん日食が見られるぞ。ずっと金かん日食を見てみたいとあこがれていたクロにとって、どんなことよりもうれしい知らせだった。クロは、何日も何日も首を長くしてまった。

五月二十一日、クロは朝起きるとすぐに外へ飛び出した。空をながめると、雲のすき間から三日月になった太陽が見え始めた。森の中を見わたすと、木もれ日 が全て三日月の形になり、落ち葉を照らしている。

「ああ、なんてきれいなんだろう。月が太陽をかくすなんてすごいことだな。月に行けば、もっと美しい星が見られるんだろうな。よし、ぼくも宇宙に行こう。」

クロは、早速宇宙へ行く計画を立て始めた。

次の日、クロはぎらぎらと輝く太陽の下で、汗を川のように流しながら、ロケットを作り始めた。まず、

大きな木や木の実、草など、ロケットを作るための材料を集め始めた。

「はあ、つかれた。一人で作るのは大変だな。」

とクロがつぶやくと、一匹のルリカケスが、

「だいじょうぶ。ぼくたちが手伝おうか。」

と話しかけてきた。周りを見まわすと、森の生き物たちがたくさん集まっていた。

「みんな、ありがとう。力を合わせて作ろう。」

とクロが言うと、森の仲間たちは、

「よおし、やるぞ。おお。」

とかけ声をかけて、ロケット作りに取りかかった。材料が集まり、いよいよ大きな木をつるで結んで船体を作り始めた。力持ちのオットンガエルたちが手伝ってくれるおかげで、どんどんできあがってきた。そのとき、

「おおい、クロ。この木使えるのか。」

と、森で一番物知りのオットンガエルが、一本の木を片手で持つてとんできた。そして、

「これこれ。ここのところ、くされてるぞ。」

と、クロの顔をのぞきこみながら言った。

「大丈夫だよ。このくらい、なんてことないさ。」

クロはもうすぐ完成しそうなロケットを見て、宇宙のことで頭がいっぱいだった。だから、そんなことは

耳にも入らなかったのだ。その一本の木であんなことになるなんて、その時はだれも思いつきもしなかった。「ついに、ロケットが完成したぞ。あとは森中の鳥さんたちにお願いで、連れていってもらおう。」

ビュービュー。風の強いある日、森中の鳥たちが集まり、ロケットを引っぱり宇宙めがけて飛び立った。見送りをしてくれた森の仲間たちが、みるみる小さくなっていく。ロケットは風になり、空の雲へとすいこまれていった。ゴオオ、ゴオオオツ。雲の中心に近づくと、嵐のような風が吹き始めた。すると、その時、あの一本のくさった木がボキリと折れてしまったのだ。ガタガタガタツ。ロケットが今にもばらばらになりそう。どうしよう。あのときに、しっかり木を見ていればよかった。このままでは、ロケットが落ちてしまう。ク口は、頭の中が不安でいっぱいになった。その時、一番大きなルリカケスが、

「ク口、もう少しだ。あきらめずにがんばれ。」

とはげましてくれた。自分も飛ぶので精一杯なのに。森の仲間のためにもあきらめないぞ。ク口は、胸のおくがじいんと強くしびれた。雨や風が体中に突きささり、雷もすぐそばで光っている。目は開けられず、思うように息もできない。絶対に宇宙に行くんだ。ク口は意識がうすれていく中で、必死にロケットにしがみ

ついた。

風がぴたりとやみ、からだは太陽の明るさと温かさ

に包まれた。ク口は、おそろおそろ目を開けた。すると、果てしなく続く真っ黒な空に、きらきらと輝くダイヤモンドのような無数の星がク口を迎えるように、やさしく光っていた。

「やったぞ。ついに月に着いたんだ。みんな、ありがとう。みんなのおかげで、月までこれたよ。森のみんなによるしくね。」

ク口は地球へ帰っていく鳥たちを見送ったあと、月に降りて宇宙の星々をながめてみた。地球では夕方西の空に一番星としてとても明るく輝く金星は、卵のようにつるつるとして、さらに明るく輝いている。木星を回るイオ、エウロパ、ガニメデ、カリストの四つのえい星や土星のリングも、地球で見るよりもくつきりと大きく見える。ク口は、あきることなく星をながめ続けた。

月から見る星々がとても気に入ったク口は、月でくらすことにした。ロケットをいつしよに作った仲間たちは、月にうつる黒いうさぎのかげを見ては、ク口が元気にくらししていることをよるこんだ。ク口は、地球のみんなを、ずっとずっと見守り続けている。

